

日本社会福祉教育学会

NEWS LETTER No.35

Japanese Society for the study of Social Welfare Education

事務局 〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1 東北公益文科大学 小関研究室 気付
TEL 0234-41-1288 E-mail: info@jsswe.org http://jsswe.org/

2021 年 3 月 31 日発行

目次

1 巻頭言	1
教育の新たな可能性 - 危機とイノベーション - (日本社会福祉教育学会会長 志水 幸) .1	
2 第 16 回大会報告	2
□■□参加者の声から□■□	3
日本社会福祉教育学会第 16 回大会に参加して	3
第 16 回日本社会福祉教育学会に参加して	4
学会企画シンポジウム「実践力を育むための ICT 活用の視点」に参加して	6
オンライン開催大会に参加して	6
2 第 17 回大会「社会福祉分野における ICT 活用教育の課題と展望－ウィズ／アフターコロナ時代の社会福祉教育を考える－」開催案内	8
3 総会及び理事会報告	10
4 第 6 期理事会体制	14
5 事務局からのお知らせ～2021 年度年会費納入依頼の発送について	15

1 巻頭言

教育の新たな可能性 - 危機とイノベーション -

日本社会福祉教育学会 会長 志水 幸 (北海道医療大学)

現在、人類は新型コロナウイルス禍という未曾有の危機に直面しております。人類の歴史において、世界中が一斉に打撃を受けるような危機は、かつて無かったことです。あえて先例を見出すならば、氷河期に匹敵するものと言っても過言ではありません。栗本慎一郎は『パンツを

はいたサル』(光文社、1981 年)の中で、「人間は、20%の人間性と 80%の動物性から成る」と指摘しました。そこには、パンツ(衣類)＝人間という構図があります。ダイヤモンド・オンラインメールマガジンに掲載されたマックス・プランク進化人類学研究所のキットラー博士

らに関する記事によると、人類が衣類を着はじめたのは約7万年前の最終氷期のウルム氷期が始まったと推論されております。また、アンザック・ニュートンが万有引力を発見したのは、大学在学中の1665~1666年のペスト蔓延による大学閉鎖の最中でした。後に、「創造的休暇」と言われる逸話です。このように、人類の歴史は危機に直面しても、必ずそこから何かを学び取ってきたのです。

さて、この度はどうでしょうか。教育界では、オンライン授業をはじめとするICT導入が一気に加速しました。もともとは、対面授業の代替として導入されたオンライン授業でしたが、アフター・コロナにおいても一定の授業形態として意味を持つまでになってきております。この間、教育者としての教材開発や授業改善のための工夫は並々ならぬものであったと拝察いたします。併せて、電子ブック等の新たな教材も普及してきており、社会福祉学分野においても徐々に浸透しつつあります。わが国の文部科学行政においても、幸いにもコロナの直前からICT教育推進に舵を切ったことが、多くの混乱の中で一定の効果を生み出したのも事実です。初等・中等教育では、新しい時代に必要となる

資質・能力の育成の観点から、「どのように学ぶのか（主体的な学び、対話的な学び、深い学び）」や「何ができるようになるのか」を基本とする学習指導要領の改訂が行われ、2018年度から順次導入され始めております。さらに、今年度から導入された大学入学共通テストで求められる力は、思考力・判断力・表現力とされております。その評価は歴史に委ねるとして、これらの変革の先に位置づく高等教育はどうでしょうか。改めて、“場としての学校の意義”や“授業のあり方”が問われるところです。

他方、コロナ禍は学生の休学や退学をはじめとする経済的課題やメンタルヘルス等々の課題も生み出しました。これらの課題への対応は、教育機関あるいは教育者としての真価が試されるところです。わが国でも広く紹介された武漢在住の作家方方（ファンファン）さんの『武漢日記』2020年2月28日の一節は、「一つの国が文明国家であるかどうか、- 中略 - 基準はただ一つしかない、それは弱者に接する態度である」と喝破しておられます。この「弱者」を「ともに生きる者」と読替えたらどうでしょうか。社会福祉や教育に携わる者として、重く受け止めるべき言葉です。

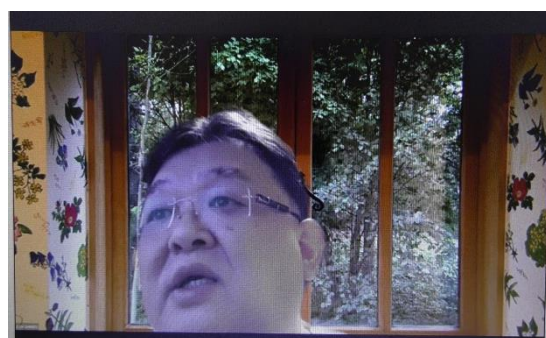
2 第16回大会報告

2020年8月29日（土）、30日（日）に関西学院大学にて開催を予定していました第16回大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため現地開催を中止し、オンラインで8月30日（日）の1日に短縮して開催されました。

テーマも「社会福祉教育の普遍性と特殊性～ポスト・コロナの福祉教育を考える」として、新型コロナウイルスの世界的蔓延により教育においても様々な制約が課され、それらへの対応が迫られる中で、この状況下にあるからこそ考えられることをテーマとして設定した大会となりました。ご参加くださった皆様には厚く御礼申し上げます。



司会：阪口 春彦 理事（龍谷大学短期大学部）



開会挨拶：志水 幸 学会長（北海道医療大学）

日本社会福祉教育学会第16回大会に参加して

山田 克宏(秋田看護福祉大学)

この度、日本社会福祉教育学会第16回大会—社会福祉教育の普遍性と特殊性～ポスト・コロナの福祉教育を考えるに参加させていただいた。今大会は、新型コロナウイルス感性拡大防止のため会期を一日に短縮し、オンラインでの開催となった。開催校シンポジウム「社会福祉領域における初年度教育～社会を変える人材はいかにして育つか～」に始まり、自由研究発表が3本、学会シンポジウム「実践力を育むためのICT活用の視点」が実施され、社会福祉教育と初年度教育の連関性の意味、ICTを活用するなかで学習習熟度や実践力向上に影響を与えることになることなど学びが深い時間を過ごすことが出来た。

その中で今回は、開催校シンポジウムについて触れさせていただきたいと思う。テーマは、「社会福祉領域における初年次教育の可能性～社会をかえる人材はいかに育つか」で、梓川一先生(東大阪大学短期学部)からは、「人と人との関わりの体験から人間的成長へ～初年度実践教育にみる人間教育の可能性～」、山下匡将先生(名古屋学院大学)からは、「スタディスキルが社会との接点を切り拓く」の発題でお話しいただけた。

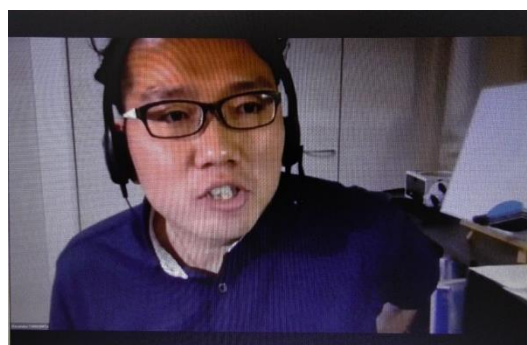
具体的には、社会福祉士の養成校は、どのようなテーマを掲げて専門職養成に取り組んでいるのかということである。梓川先生は、「社会

福祉の教育は、人間を深く感じ取り生きていくことに通じていることから、教員や専門職も気づいていない発展の可能性がある」という問いから始まった。その上で、森田らの先行研究を引用しながら初年度実践教育の意味を、社会福祉の学び方という態度や協働を通じて関係性を実感することを強調されていた。さらに、社会福祉の学びを3段階に分けている。①学ぶノウハウを学ぶ、②学びの態度の変化、③将来について考える、以上の3段階である。学ぶことと体験することが行き来していくこと、自他尊重を重要視されていた。このことは、フランクルの『死と愛』のなかで「人間の存在における価値の実現化のなかでの創造価値、体験価値、態度価値3つの重要性を述べていると共に、自己の変容を目指すことは、苦悩していくことが必要不可欠であり(1957:120-121)とし、人間の本質的意味を問うている。そういう意味では「生きる意味」見いだすことと福祉教育の学ぶ態度は、関係しており、梓川先生のいう「教養として福祉」の本質であろう。

また、山下匡将先生(名古屋学院大学)は、「社会福祉教育は、人や社会を理解し、社会に働きかける力を育むこととしており、その具体例として「熱田区地域支え合い創出事業(プロジェクト)」の取り組みから説明された。山下先生が導いた結論は、リベラルアーツ(教養教育)のなか



人と人との関わりの体験から人間的成長へ
梓川 一 会員 (東大阪大学短期大学部)



スタディスキルが社会との接点を切り拓く
山下 匡将 会員 (名古屋学院大学)

に、社会福祉教育を取り入れるべきとする提言である。

つまり、体験的学習していくことで学生が成長する姿は、スタディスキルの活用する意味と社会福祉教育が繋がっていることを証明したことになる。

このシンポジウムからは、何を教育するのかわけではなく、何を目的として、教育を通じてどのように学習効果を高めるのか、学生の動機

付けを促すのか、さらには、それがどのような教育的効果をもたらすのかを含め、ループリックの重要性と社会人としての教養と人間理解を深めることの重要性を再認識する機会となりました。この度は、コロナの影響でオンライン学会ということで開催校の川島先生をはじめ事務局の皆様大会運営へのご尽力に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

コーディネーター

川島 恵美 理事（関西学院大学）



コメンテーター

小山 隆 副会長（同志社大学）



第 16 回 日本社会福祉教育学会に参加して

田中 秀和（立正大学）

筆者は、パソコンが苦手である。新型コロナウイルスによって 2020 年当初は想像もしなかった現実が押し寄せるなか、本学では、今年度前期は原則すべての授業がオンラインにて実施されることになり、今後の状況も不透明である。筆者は、試行錯誤の連続のなかで、オンライン授業を実施しているのが現状である。

このようななか、少しでもオンライン授業を効果的に行い、より質の高い教育実践を行っていくためのヒントを求めて学会へ参加させていただいた。

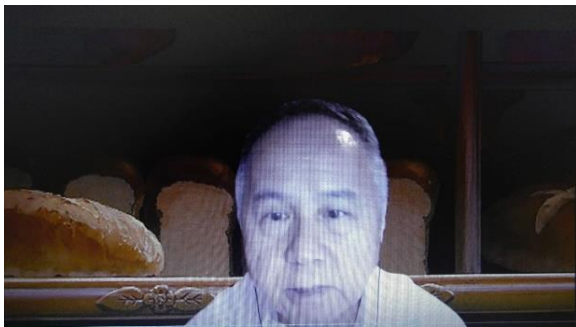
ここでは、学会当日の午後に開催された学会企画シンポジウム「実践力を高めるための ICT 活用の視点」の感想を中心に述べてみたい。同シンポジウムは、コーディネーターを高橋信行

氏（鹿児島国際大学）として、宮本雅央氏（青森県立保健大学）、長崎和則氏（川崎医療福祉大学）、新田博之氏（医療法人 参天会副理事長）の 3 名のシンポジストからそれぞれ発表が行われた。



ICT と教育効果

宮本 雅央 会員（青森県立保健大学）



教育ツールとしての ICT

導入事例と遠隔授業

長崎 和則 会員（川崎医療福祉大学）



実践ツールとしての ICT 先駆的事例からみる

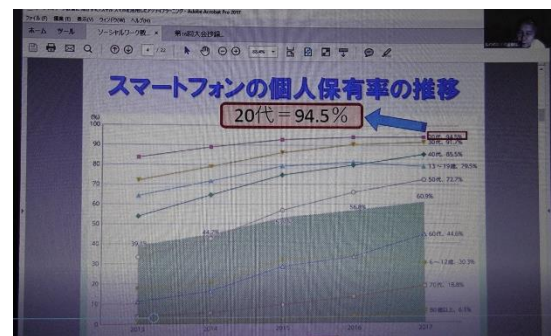
教育内容

新田 博之氏（医療法人参天会 副理事長）

上記のなかで、筆者は特に長崎氏からの報告が印象に残った。それは、「教育ツールとしての ICT 導入事例と遠隔授業」と題され、学生の ICT 環境や ICT を用いた演習授業のあり方などが話された。

筆者自身が、生活保護や貧困問題の研究を行っているためか、長崎氏からの報告のなかで、ICT 環境が整っていない学生が一定数いることが気になった。また、wi-fi 環境が整っていない

学生、ノートパソコンや印刷機を持っていない学生も少なからず存在していることを長崎氏の報告は改めて教えてくれた。



ICT を用いた教育は、便利であり有効活用することによって、新しい学びの機会になる側面があることは間違いない。しかし、その一方で、そもそもそのような環境を整えることができない学生が一定数存在することは、教員として忘れてはならないことであると感じた。この課題に対する対応は各大学によって異なるものであろうが、経済的に ICT 環境を整えることが困難である学生には、大学が主体的にその環境を作り出していくことが必要であろう。このような ICT 環境の学生による差の背景のひとつには、学生本人にはどうすることもできない家庭の経済格差や、親の就労状況の不安定さがあると推察される。ICT 環境を整え、それを教育に活かす視点は必要不可欠ではあるものの、そのスタート地点にはすべての学生が平等に立てるようにすることが大切であろう。

今回の学会参加は、貴重な自分自身の学びの場となり、これからの教育に活かすことのできる様々な情報を手にすることができた。新型コロナウイルス対応で大変ななか、本学会を開催下さった関係者の皆様にお礼申し上げたい。



コーディネーター

高橋 信行 理事（鹿児島国際大学）

学会企画シンポジウム「実践力を育むための ICT 活用の視点」に参加して

加藤 慶(東京通信大学人間福祉学部)

今回、新型コロナウイルス感染拡大防止により、初めて、オンライン開催のよる学会大会に参加させて頂くこととなりました。社会福祉教
コロナウィルスの人間にとって、この新型コロナウィルス禍にあって、ICTを積極的に活用して、いかに力あるソーシャルワーク専門職の育成をしていけるかは最も関心のある事柄であるといっても過言ではないと思われます。日本社会福祉教育学会は、いま、社会福祉専門職養成に携わる多くの人々から期待されている学会だと思えます。今回の学会企画はその期待に応えてくださるものでした。企画ではオンライン教育による実践力を育む授業の試みとして、通学課程の大学である川崎医療福祉大学と青森県立保健大学の実践、そして福祉現場におけるオンライン化の取り組みについて、ご報告をもとに議論が行われました。

すでに多くの通信制の福祉系大学や養成施設が存在し、通信教育で学ぶ学生が多い社会福祉士・精神保健福祉士養成の状況の中であっても、ソーシャルワーク専門職養成をオンライン教育でいかに行うのかという話題は、新型コロナウイルス以前の状況であれば関心が持たれにくく、さらには、オンライン教育による方法論の議論を、複数の養成校関係者で共有することも難しかったのではないかと感じます。

私が勤務している東京通信大学は、全国どこからでも低額な学費で卒業ができる、2018年に開学したばかりのオンライン通信制大学です。そのような立場から言えば、オンライン教育によるソーシャルワーク専門職養成について、複数の養成校における試行錯誤や工夫をうかがうことが出来たのは最大の成果でした。

新型コロナ以前は、オンライン教育に対する誤解(「通学課程の授業と比較すると、オンライン授業は簡単に出来て、教員は手を抜いた質の低い授業をしている」など)が一部にあったように思います。どうしたら、力あるソーシャルワーク専門職の養成をオンライン教育で提供していけるかという悩みや教育上のさまざまな工夫も、オンライン教育そのものを否定的に捉えられてしまうと、その「わかちあい」が難しいと感じることもありました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大という大きな社会的課題の中、結果として多くの社会福祉関係者がオンライン教育に関心を寄せることになり、私にとっては「わかちあい」が出来るようになったと感じます。オンライン教育による実践的知見の共有が、今後、さらに行われるようになることを期待させられる企画でした。



オンライン開催大会に参加して

安藤 幸(京都大学大学院教育学研究科)

2020年8月に入会し、初めて大会に参加しました。実は、入会決定のお知らせをいただいた時には、大会参加の申し込みはすでに締め切られていました。どうしても参加したいと無理を

承知でお願いし、参加を認めていただいたこともあり、本大会への参加をとっても楽しみにしていました。

私は、アメリカの大学でソーシャルワークを学び、学位を修めたのち、ソーシャルワークの大学教員になりました。アメリカの大学で外国人としてソーシャルワークを教えることは、挑戦の日々でした。約 16 年間のアメリカ生活を経て、2015 年日本に帰国してからは、理工系大学院教育の国際化に関わる業務に携わっていました。2018 年から現職ですが、所属の研究科にソーシャルワークを専門とする教員は私ただひとりです。身近に有志もおらず、ソーシャルワーク教育の現場から遠く離れてしまった気がして、心細い日々を送っています。現在はソーシャルワーク教育に直接関わってはいませんが、今年度採択された科研費ではソーシャルワーク専門職教育の国際比較研究を計画しています。(もし興味を持ってくださる先生がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡ください。)今は、研究の面でソーシャルワークにしっかりと向き合いたいと思っています。日本のソーシャルワークとその教育について学びたい、教育の現場で尽力されている先生とのネットワークを築きたいとの思いで、大会に参加しました。

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、今年予定されていた国内外のシンポジウムや大会は、軒並み中止や延期に迫られています。しかし、新型コロナウイルス感染症の終息には数年かかるとも言われており、それまで人と人との交流や学びを止めるわけにはいきません。本大会は、規模を縮小しながらも、オンライン開催することで、参加者をつなぎ、共に学ぶ機会を提供していました。

講義には、4つの「よ」が不可欠だといいます。講義中や、講義と講義の間に受講者が体験する「よそ見」「寄り道」「余白」「余談」の4つが、学びを深めてくれるということです。私はシンポジウムや大会に参加する時、特に「余白」を楽しみにしています。例えば、休憩中そばに居合わせた参加者との予期せぬ出会いから、講演内容について意見交換したり、研究や教育のアイデアを得たりすることがよくあります。オ

ンライン開催の本大会では、残念ながら、私が期待していた「余白」を楽しむことができませんでした。しかし、凝縮された時間内、Zoom という制約のある空間内だからこそ、明確なテーマ設定がなされ、的を絞った議論が可能になっていたように思います。講演中には、追加の情報をネットで検索したり、チャット欄に記された参加者からの質問やコメントに目を通したりして、テーマの広がりを感じることができました。また、講演者や参加者の顔とお名前をZoom上で拝見できたので、みなさんをより身近に感じられ、共に参加している実感を持つことができました。このような「よそ見」「寄り道」「余談」体験を通して、学びが深まったように思います。

今、「ポスト・コロナの教育再生」が喫緊の課題とされています。しかし私は、「ポスト・コロナ」という言葉に違和感を覚えます。学びの機会を脅かすのは、新型コロナウイルス感染症に限らないからです。人災や天災は日々起こっており、大なり小なり学びの中断を伴います。一定の場所に一同が会して同時に学ぶ従来の方法のみに頼らない、多様な学びのあり方がますます必要になると思います。本大会の主要テーマの1つであるICTを活用した学びのあり方は、社会のニーズに合ったソーシャルワーカーの育成に新たな可能性を提示しました。

人と社会に積極的に関わるのが強みであるソーシャルワーク専門職にとって、対面的なつながりの分断は致命的です。また、私たちを取りまく社会環境はICT技術の発展によって目まぐるしく変化しており、ソーシャルワーク実践におけるソーシャルワーカーとクライアントの関係にも影響を及ぼし始めています。ソーシャルワーカーに必要とされるコンピテ



ンスとリテラシーを涵養するために、今後は、対面とオンラインの教育それぞれが持つ良さを活かしたハイブリッド型教育を提案していく必要があると思います。本大会は、これまでに学会が培ってきた人的・社会的な資源を活か

しながら、オンラインであっても人や社会とのつながりを維持し、さらには議論を深めることができるという、次世代に向けたグッドプラクティスになったのではないのでしょうか。

2 第 17 回大会「社会福祉分野における ICT 活用教育の課題と展望－ウィズ／アフターコロナ時代の社会福祉教育を考える－」開催案内

2021 年度の大会は、6 月 19 日（土）～20 日（日）にオンラインにて開催します。例年より早い時期での開催となりますが、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております！！

大会テーマ

「社会福祉分野における ICT 活用教育の課題と展望
－ウィズ／アフターコロナ時代の社会福祉教育を考える－」

■開催趣旨

本大会はコロナ禍の影響を踏まえオンライン開催とします。大会テーマである「社会福祉分野における ICT 活用教育の課題と展望」もまた、コロナ禍の中で、全国の社会福祉教育現場が遭遇した ICT 活用教育のあり方について検討するとともに、その経験を今後の ICT 活用教育にどのように生かすか、またその課題について検討することを目的とします。

■大会スケジュール

1 日目 6 月 19 日（土）

13：00	開会式
13：00～14：30	基調講演 「コロナ禍を経験してのニューノーマルなオンライン教育の可能性」 講師：山田 礼子（同志社大学 社会学部 教授、大学教育学会 学会長）
14：45～17：15	学会企画シンポジウム A テーマ「福祉専門職養成における ICT 活用教育の課題」 シンポジスト 池田 雅子（北星学園大学社会福祉学部 教授） 保正 友子（日本福祉大学社会福祉学部 教授） 佐藤 貴之（北九州市立大学基盤教育センター及び地域創生学群 教授） コーディネーター 白川 充（仙台白百合女子大学人間学部 教授）

2日目 6月20日(日)

9:30~12:00	学会企画シンポジウム B テーマ「障害を持つ学生に対する ICT 教育の現状と課題」 シンポジスト 大友 秀治（北星学園大学社会福祉学部福祉臨床学科准教授） 瀧本 美子（龍谷大学障がい学生支援室支援コーディネーター） 大村 美保（PHED（障害と高等教育に関するプラットフォーム）SIG-CSW（キャンパスソーシャルワーク専門部会）メンバー、筑波大学人間系障害科学域助教） コーディネーター 阪口 春彦（龍谷大学短期大学部 教授）
12:20~13:00	学会総会
13:00~15:00	自由研究報告

■参加費

会員	2,000 円
非会員	3,000 円
大学院生・学生	1,000 円

※支払い方法は銀行振り込み、またはオンライン決済を準備中です。

準備ができましたら、参加申込とともにホームページにてお知らせいたします。

■自由研究報告

演題申込締め切り 5月9日(日)まで申し込みを受け付けています。

↓大会情報確認や演題申込等はこちらから↓



3 総会及び理事会報告

第 16 回大会を新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催としたことにより、同日開催予定でした 2020 年度総会についてはメール配信で議案書をお送りする書面開催といたしました。本総会では、下記 6 つの議案が上程され、2020 年 8 月 29 日（土）17 時の議決締切の時点においてご意見・ご異議等は無く、いずれの議案も承認となりました。当該結果につきましては、第 16 回大会開催時にご報告しておりますことを併せてご報告いたします。

第 1 号議案 2019 年度事業報告

第 2 号議案 2019 年度決算報告および監査報告

第 3 号議案 2020 年度事業実施中間報告兼補正事業計画・予算

第 4 号議案 2021 年度事業計画

第 5 号議案 2021 年度予算

第 6 号議案 第 6 期役員選出について

以下、第 5 期 2019 年度第 4 回理事会（2020 年 8 月 21 日開催）、第 6 期 2020 年度第 1 回理事会（2020 年 8 月 30 日開催）、第 2 回理事会（2021 年 3 月 28 日開催）について、ご報告いたします。

2019 年度第 4 回理事会

1. 開催概要

【日時】2020 年 8 月 21 日（金）19 時 00 分～21 時 30 分

【会場】Zoom（オンラインビデオ会議）

【出席者】[理 事] 志水 幸・川廷宗之・小山 隆・保正友子・阪口春彦・小関久恵（事務局長）
[監 事] 福山和女 [事務局] 宮本雅央・山下匡将

【委任状】[理 事] 川島恵美・高橋信行・明星智美 [監事] 笛木俊一

【欠席者】[事務局] 村山くみ・早川 明

2. 報告

（1）第 16 回大会について

宮本事務局員から、参加申込者数および自由研究報告のエントリー数について報告があった。当日は、総合司会を阪口理事、自由研究報告の座長を保正理事にそれぞれ依頼すること、Zoom 開催に伴う参加者の注意事項（マイクミュート、チャットの使用禁止等）および Zoom ホストを事務局が務めることを確認した。

（2）第 6 期役員選挙の結果について

宮本事務局員から、選挙管理委員会の資料にもとづき、役員選挙の結果について報告があった。なお、選挙権について、コロナウイルス感染症拡大の影響に配慮し、「前年度中に納入済みである」という条件（役員選出規程第 5 条）を弾力的に扱ったとの補足があった。

（3）退会者について

小関事務局長から、5 名の退会について報告があった。

3. 議事

（1）第 6 期推薦理事の選出について

小関事務局長から、役員選挙の結果にもとづき、小山 隆会員、志水 幸会員、小関久恵会員、白川 充会員、白澤政和会員、保正友子会員、高杉公人会員を当選理事とすることの説明があった。なお、得票数では、高橋信行会員が高杉公人会員を上回っていたが、高橋会員の辞退により、次点の高杉会員が繰り上げ当選したとの補足があった。

意見交換の後、役員選出規程第 10 条における「直接選挙によらない 3 分の 1 の理事(推薦理事)」について、川島恵美会員、阪口春彦会員、西川ハンナ会員を第 5 期理事会から推薦することを全会一致で承認した。

(2) 2020 年度総会議案書について

小関事務局長から、総会における議事(第 1 号～第 6 号)について説明があった。また、第 2 号議案「2019 年度 決算報告(案)および監査報告」について、福山監事から監査報告があった。軽微な修正点のほか、以下のような指摘や意見が挙げられた。

第 2 号議案について、福山監事から、予算の執行にあたって事務局長の立て替え払いが多いとの指摘があった。また、第 3 号議案「2020 年度 事業実施中間報告兼補正事業計画・予算(案)」について、小山副会長から「報告と議案は分けるべきである」との指摘があった。この件については、年度(4 月～翌年 3 月)と学会総会(8 月頃～翌年 7 月頃)という区切り方にズレがあるために生じることであり、第 6 期理事会において見直しを検討することとした。その他、学会誌の学会 HP での公開および HP の更新頻度の向上について検討するよう意見が挙げられた。

以上、修正した議案書を総会に諮ることを確認し、全会一致で承認した。

(3) 入会希望者の入会について

小関事務局長から、5 名の入会希望者について説明があった。意見交換の後、全会一致で承認した。以上 (記録者：名古屋学院大学 山下匡将)

2020 年度第 1 回理事会

1. 開催概要

【日時】2020 年 8 月 30 日(日) 12 時 10 分～12 時 40 分

【会場】Zoom (オンラインビデオ会議)

【出席者】[理 事] 志水 幸・小山 隆・白川 充・小関久恵・白澤政和・保正友子・高杉公人・川島恵美・阪口春彦・西川ハンナ [事務局] 宮本雅央・山下匡将

【委任状】[監 事] 川廷宗之・福山和女【欠席者】[事務局] 村山くみ・島谷綾郁

開会に先立ち、会長が選出されるまでの間、志水理事を議長とすることを出席理事全員で確認した。

2. 報告

(1) 2020 年度総会について

志水理事から、第 16 回大会をオンラインにて開催したことに伴う、総会の書面開催について、期限までに議案書に対する質問や意見は無く、総会議案のすべてが承認されたとの報告があった。

(2) 第 6 期役員選挙の結果について

小関理事から、小山 隆会員、志水 幸会員、小関久恵会員、白川 充会員、白澤政和会員、保正友子会員、高杉公人会員を当選理事とすること、また、川島恵美会員、阪口春彦会員、西川ハンナ会員を推薦理事とすることについて報告があった。なお、得票数では、高橋信行会員が高杉公人会員を上回っていたが、高橋会員の辞退により、次点の高杉会員が繰り上げ当選したとの補足があった。

その後、出席理事全員から自己紹介を兼ねた挨拶があった。

3. 議事

(1) 第6期理事会の体制について

第一に、日本社会福祉教育学会規約第16条にもとづき、志水理事を会長として互選した。なお、以降は、志水会長を議長として議事を進行することを確認した。

第二に、同第17条にもとづき、志水会長が、小山理事および白川理事を副会長に指名した。

第三に、志水会長から、委員会制の導入について提案があり、全会一致で承認した。その際、当該委員会には、理事会メンバー以外の会員も加えることが出来ることを確認した。第1委員会は、小山副会長を委員長、白澤理事、西川理事、保正理事を委員として、学会誌・ニュースレター(NL)など学会刊行物を担当する。なお、西川理事がNL編集委員長、保正理事が学会誌編集委員長を、それぞれ務める。また、第2委員会は、白川副会長を委員長、川島理事、阪口理事、高杉理事を委員として、大会・研究集会などの学会イベントを担当する。

第四に、志水会長から、小関理事を事務局長とする提案があり、全会一致で承認した。

第6期理事会のメーリングリストを急ぎ作成することを確認し、2020年度第1回理事会を閉じた。以上 (記録者：名古屋学院大学 山下匡将)

2020年度第2回理事会

1. 開催概要

【日時】2021年3月28日(日)9時00分～10時30分

【会場】Zoom(オンラインビデオ会議システム)

【出席者】[理事] 志水 幸・小山 隆・白川 充・白澤政和・保正友子・阪口春彦・川島恵美・西川ハンナ・高杉公人・小関久恵(事務局長) [監事] 福山和女 [事務局] 宮本雅央・山下匡将

【欠席者】[監事] 川廷宗之 [事務局] 村山くみ・島谷綾郁

2. 報告

(1) 第11回春季研究集会について(第2委員会報告)

白川副会長から、2021年3月13日(土)に第11回春季研究集会をオンラインで開催し、22名(定員30名)の参加があったとの説明があった。小山副会長から、オンラインイベントへの非会員の参加者増に向けて、PR方法を検討していくべきであるとのコメントがあった。

(2) 学会誌について(第1委員会報告)

保正理事から、第6期査読委員会を30名で組織したこと、学会誌第22号・23号(21年3月発行予定)は原稿1本が第3査読に回ったため編集中であること、そして、第24号(21年9月発行予定)は原稿2本が査読中であることについて説明があった。

(3) NLについて(第1委員会報告)

小関事務局長から、NL第35号の発行が滞っていること、しかし、近日中に発行する予定であることについて説明があった。なお、NL担当の島谷事務局員が産休(育休)中のため、当面の間、小関事務局長がNL担当を兼任することを確認した。

(4) 会員の退会について(事務局報告)

小関事務局長から、8名が退会したとの説明があった。なお、退会の主な理由は、(学会の活動に)「参加できていない」「満足に関わっていない」ことであったことを確認した。

(5) その他

小関事務局長から、APASWEへの本学会の加盟について、「2021年度加盟」で申請を進めているとの説明があった。阪口理事から、本学会の会計としては、2020年度予算からの執行になるとの補足があった。なお、加盟が決まり次第、学会HPを使って周知することを確認した。

3. 議事

(1) 第 17 回大会について

第 2 委員会白川副会長および阪口理事から、資料「第 17 回大会企画と検討課題」にもとづいて、大会テーマ、プログラム、基調講演および学会企画シンポジウム（A・B）の企画詳細について説明があった。また、宮本事務局員から、当日までの運営スケジュールについて補足があった。

①参加費について

志水会長から、大会 2 日間の参加費（資料代を含む）として、「会員 2,000 円」、「非会員 3,000 円」、「大学院生 1,000 円」を設定することの提案があり、全員一致で承認した。

②発表資料等の公開について

志水会長から、第 17 回大会については、参加者に対してのみに資料を公開し、一定期間経過後に広く公開するとの提案があり、全員一致で承認した。公開にあたっては、報告者等（著作権者）から許諾を得る。なお、録画した動画については、接続トラブル等が生じた場合の情報保障（保証）の目的のみで使用することを確認した。

その他、以下のコメントがあり、今後の検討材料とする。

- ・イベントごとに参加費を設定するのであれば、年会費の内訳（年会費には何が含まれているのか）を明確にすべきであり、かつ参加費に見合ったイベントの提供が必須となる
- ・オンラインでは、1 名の参加申し込み（アカウント）で複数名が視聴することや資料をコピーすることが容易であるため、対策が必要である
- ・会員向けのサービスとして、著名な講師による講演等の動画配信があっても良いのではないかと
- ・「著作権の譲渡を受ける」ことは学会として負担になるため、「著作物の管理の委託を受ける」といった方向を検討しても良いのではないかと

(2) NL について

第 1 委員会西川理事から、資料「ニュースレター等について（案）」にもとづいて、NL の今後の方針および 2021 年度の発行計画について説明があった。編集会議に安藤幸会員（京都大学）を加えること、第 38 号を電子版（学会HPに掲載）にて試験的に発行することを、全員一致で承認した。なお、小山副会長から、NL が「レター（紙媒体）」であること、すなわち、学会からの郵送物が会員の手に届くことのメリットについても検討するように要望があった。

(3) 入会希望者の入会について

小関事務局長より、資料「入会希望者一覧」にもとづいて、4 名の入会希望者について説明があった。意見交換の後、全員一致で承認した。

(4) その他

①名誉会員の推挙について

志水会長から、笛木俊一氏（日本福祉大学名誉教授・前本学会監事）を名誉会員に推挙したいとの提案があった。名誉会員の授与には本人の承諾が必要なため、笛木氏に確認を取り、次回理事会に諮ることを全員一致で承認した。

②2020 年度総会について

志水会長から、2020 年度総会を、第 17 回大会の 2 日目（6 月 20 日）に開催したいとの提案があった。意見交換の後、全員一致で承認した。

次回理事会を 2021 年 6 月 13 日（日）に開催することを確認し、2020 年度第 2 回理事会を閉じた。以上（記録者：名古屋学院大学 山下匡将）

4 第6期理事会体制

改めまして、2020年度総会より新体制となりました第6期理事会体制を以下ご報告いたします。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

第6期理事会（2020年度総会～）

会長		志水 幸（北海道医療大学）
副会長		小山 隆（同志社大学） 白川 充（仙台白百合女子大学）
理事	第1委員会※1 小山 隆	白澤 政和（国際医療福祉大学大学院） 西川 ハンナ（創価大学） 保正 友子（日本福祉大学） 担当事務局員 学会誌：山下 NL：島谷
	第2委員会※2 白川 充	川島 恵美（関西学院大学） 阪口 春彦（龍谷大学短期大学部） 高杉 公人（新見公立大学） 担当事務局員 大会：宮本 研究集会：村山
事務局長		小関 久恵（東北公益文科大学）
監事		川廷 宗之（大妻女子大学名誉教授） 福山 和女（ルーテル学院大学名誉教授）
事務局員		島谷 綾郁（敬心学園 職業教育研究開発センター） 宮本 雅央（青森県立保健大学） 村山 くみ（東北福祉大学） 山下 匡将（名古屋学院大学）

役職別五十音順

※1 学会誌・ニュースレター（NL）など学会刊行物担当

※2 大会，研究集会など学会イベント担当

5 事務局からのお知らせ～2021 年度年会費納入依頼の発送について

2021 年度会費納入のご依頼を 5 月初旬に発送する予定です。ご準備とご納入のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

